

学生企画グループの活動を通じた保育者としての力量向上

—コミュニケーション力・主体性に着目して—

森 下 嘉 昭 上 村 有 平

1. はじめに

保育者に求められる力量・資質の中でも、近年さまざまなところでその必要性が議論されているのが「コミュニケーション力」である。保育現場においては、子どもとのコミュニケーション、あるいは保育者集団としての職務遂行にとどまらず、保護者対応の力量までもが求められるようになってきている。それゆえ本学においても、学生のコミュニケーション力向上を意識した教育活動を展開している（たとえば卒業研究の一端については、森下・上村（2012）¹⁾を参照されたい）。そうした中で筆者らが現在特に力を入れて取り組んでいるのが、学生企画グループ「G会」（以下「G会」）である。

そもそもG会とは、有志の学生を主体として2012年度に結成された。G会という名称も、Geitan（芸短：山口芸術短期大学の略称）、Good、Great、Ganbaru（がんばる）、Genki（元気）などの頭文字「G」をもとに、学生たちによって命名された。このG会は、大学広報のために学生のアイデアを取り入れるという趣旨で立ち上げられ、結成当初は、主にオープンキャンパスのスタッフとして高校生に大学の魅力を発信する役割を担っていた。もちろんそれまでのオープンキャンパスにおいても、学生の協力を一時的に仰ぐことはあった。これに対してG会は、長期的かつ系統的にグループとして活動に取り組む点に大きな特徴がある。

このようにG会の目的はあくまで大学の魅力を発信することであり、学生のコミュニケーション力向上を直接企図したものではない。しかしながら、G会の活動においては、集団・組織での活動を通して参加学生間のコミュニケーションが必要不可欠なものとなっており、結果として学生のコミュニケーション力向上に寄与していると考えられる。

また当初は、オープンキャンパスの一時的な学生スタッフの延長という雰囲気が強かったため、

活動内容は、教員が企画した内容・役割を学生に分担し実施する形態を採っていた。しかし、学生のアイデアを取り入れるという趣旨に沿って活動を発展させていく過程で、G会は、学校や教員から「やらされるグループ」ではなく、自分たちが主体的に「やりたいグループ」を目指して、その様相を変化させてきた。現在では、行事や学生生活を盛り上げるために学生自らが企画・運営を進めていくという方向になってきており、その性格上、学生の「主体性」がますます重要となっている。

2016年度現在、結成5年目のG会の主な活動内容としては、オープンキャンパス（年4回）の企画・運営にくわえ、1年目から行っている新入生歓迎会でのダンスの出し物、2012年度と2013年度には卒業式後のセレモニー、2014年度以降は自主的な活動も開催されるようになり、運動会の企画・運営、幼児教育コース広報紙『今月のG』の発行、手作りのぬいぐるみ制作、G会内での1年生2年生交流会、スポーツレクリエーション（ドッジボール大会、鬼ごっこ大会）とその活動の幅を広げ、現在も参加人数が増えてきている（2年生97名中40名、1年生106名中51名）。また、高校生時にオープンキャンパスに参加した学生の中には、当時から大学入学後G会に入会したいという気持ちを抱いていた者もいたことがオープンキャンパスアンケートや入学後のG会アンケートの結果から明らかとなっており、このグループの役割はますます重要なものとなってきている。

2. 目的

そこで本稿では、学生企画グループG会の活動を通じた保育者としての力量向上について、特にコミュニケーション力と主体性に焦点をあてて検討することを目的とする。

3. 2014年度（結成3年目）までの活動からの検証

(1) アンケート調査

結成以来G会は、教員主導から学生主導の活動

へとしていくために、毎年少しずつその様相を変化させてきた。そうした中で筆者らは、結成3年目となる2014年度の終わりにメンバーの活動を振り返り、G会活動に対して学生はどのように取り組んでいるのか、活動を通してどのような影響が見られるのかを検討するため、アンケート調査を実施した。

調査対象 山口芸術短期大学G会メンバー 56名
(1年生29名、2年生27名)

調査時期 2015年1月

調査内容

- ・入会理由
- ・自分なりによく取り組んだ活動とその理由
- ・活動を通しての学習や学校生活における変化
- ・グループ内で先輩・後輩がいることの影響
- ・入会して良かったことや今後の希望
- ・全体的な感想（G会は自分にとってどのような場所か）

本項では、このアンケート結果および2014年度までの活動を踏まえ、コミュニケーション力と主体性に着目し、検証する。

(2) 結果と考察

1) 「コミュニケーション力」について

①学生間の交流の場

アンケートの入会理由で最も多かったのは、入学前のオープンキャンパスでのG会メンバーとのかかわりなどから「優しくしてもらった」「楽しい活動を一緒にしたい」「先輩とかかわりたい」など「先輩を見て憧れ、自分も大学で一緒に楽しい活動をしたいと思ったから」入会したという回答である。その他にも「友達が増えそう」「中学・高校と比べて部活がなくさみしかった」など、サークルや部活動感覚で参加している学生も少なくない。グループに在籍している学生の多くが「他クラスの学生や先輩・後輩との交流の場」として捉えていることが分かった。G会は、もともと大学の魅力を発信するという目的のもとに結成されたが、メンバーの学生にとっては他者とのコミュニケーションをとるための手段となっていることが窺える。アンケートの記述からも「いろんな人と話せるようになった」と友人以外のさまざまな人と話せるようになったという変化を感じている回答や、行事の企画・運営を通じて「相談・協力してより良いものにしよう」とすることで意識的に

他者とかかわろうとし、その成果を感じている回答が見られた。このことから、G会の活動がコミュニケーション力向上に寄与していると考えられる。

②高校生や保護者との交流の場

オープンキャンパスで学生が、参加保護者からの入試質問に教員が対応している姿を見て、反省会時に「受験を経験している自分たちが対応するのも良いのではないか」「保護者にも学生スタッフをつけた方が良い」という発言が出てきた。このことは、実習等でもなかなか接する機会が少ない保護者、つまり大人とのコミュニケーションを積極的に求めようとする姿勢の表れのようにも思われる。また、人見知りであることを自覚している学生が、オープンキャンパス参加高校生に対して自発的に話しかけたり、折り紙などの自分の得意な分野を生かしながらコミュニケーションをとる姿が見られたりもしている。本人が、後にそのことを嬉しそうに語ってくれたことから、その学生にとっては高校生とのかかわりが自分のコミュニケーションに関してささやかな成功体験ともなっていると考えられる。反省会では、「〇〇さんは積極的に話しかけていてすごいと思った」「授業で作ったものをもってきて会話をしている良いと思った」など、お互いのコミュニケーション方法から良い面を学び合うような発言も聞かれた。ここから、各々の性格や特性を生かしてコミュニケーションをとる手段を模索し成果を上げている様子が窺える。さらに、友人としての私的で自由なやり取りだけでなく、組織として何かを成していくための公的でありながら柔軟なコミュニケーション力を向上させようとしている姿が垣間見られた。

これらのことは、「コミュニケーション力をつけるための活動」で力を身につけようとしているわけではなく、「コミュニケーションを必要とする活動」の中で自然と身につけていこうとしている力であり、今後を生かしていくことのできる力となると思われる。

③先輩・後輩間の双方向の影響

アンケートを学年別に検討すると、後輩（1年生）の立場からは、先輩（2年生）に学生生活や授業・実習の様子などについて話を聞いたり、行事の準備等への先輩の取り組みを間近で見たりすることで、先輩をより一層憧れの対象と感じている

る学生も多数いることが分かった。オープンキャンパスにおける先輩の立ち振る舞いを見て、高校生や保護者など外部の人とのかかわり方を学びとっている1年生もおり、「コミュニケーションをとりたいが、どうしたら良いかが分からない」という学生にとっても助けになっていることが分かった。逆に先輩の立場からも、後輩がいることで「質問を受けたときに、自分の体験を踏まえながら回答できた」「1年生に少しでも芸短の良さを伝えられるように取り組んだ」「1年生のために少しでも情報をあげたかった」など自分のこれまでの学びを実感したり、「先輩という自覚をもった」「後輩の制作物のクオリティが高すぎて、もっと頑張ろうと思えた」など、さまざまなことに自覚的に取り組まなければならないという自律的な意識の芽生えも多く見られた。このことから、1年生が先輩を見て懂れるだけでなく、2年生にとっても先輩として見られることによる双方向の効果があった。

2) 「主体性」について

筆者らは、G会活動立ち上げ当初から現在に至る流れを通して、メンバーが主体的に活動に取り組んでいる場面を多く見てきている。アンケートにも「すべきこと、したいことが増えた分、他のことにも意識的になれた」「自覚をもって行動するようになった」「学校生活を引っ張っていくのだという気持ちになれた」といった記述もあった。

しかし、こういった主体性にかかわる記述は全体から見ればごくわずかであった。アンケートの「今後の希望」欄に自らの意見を記述していること自体が活動に対して主体的に考えていることの芽生えとして捉えることができるものの、学生たちがどのように主体性を発揮し身につけているかということをも具体的に検証することは困難であった。

4. 主体性向上のための組織改革

学生が主体性をもって活動を推進していくことができるように、現在に至るまでG会の試行錯誤は続いている。しかし、少なくとも2014年度時のアンケートからは、学生にとってコミュニケーション力の向上については実感できていたものの、主体性にはそれほど意識が向いていないと考えられる。そこで、ここでは学生の主体性の変化

を検討するため、G会の活動組織や教員のかかわりといった観点から考察を試みたい。

(1) G会活動に対する教員の前提意識

先述のように、G会は「やらされるグループ」ではなく「やりたいグループ」を目指して変化を続けてきた。それは、さまざまな行事や役割に対して学生が、教員の指示通り動く駒ではなく、主体的に楽しみながら取り組むグループになってほしいという筆者らの思いがあった。

グループへの入会は強制的なものではなく、有志の集まりである。しかし、当初はそのやる気をグループの主体的な活動につなげることがなかなかできなかった。所属する組織の中で主体性を発揮するためには、組織の中でいかに一人一人が意欲を持続できるようにするかという視点が必要となってくる。

(2) リーダーの役割設定・組織の確立

学生が組織の中で意欲をもち、主体性を発揮できるようにするために筆者らがまず取り組んだのが、リーダーの役割を明確化し、リーダーを中心とした組織を確立することである。

結成当初は実質教員が活動を主導していたため、便宜的にリーダーを決めていたものの、その役割は教員からの伝達係のようなものであった。メンバーの学生たちは、教員主導の活動の中でも一生懸命に取り組んでいたが、学生自らが創造する場面はなかなか作り出せなかった。この仕組みそのものが学生の「やらされる」という受動的姿勢を醸成していると考え、2年目からはさまざまな企画・活動に対して学生自身が責任をもって主体的にかかわるようにするために、活動時の司会・運営や、企画の責任を担う中心的存在としてのリーダー・サブリーダーを立てた。しかし、立候補によってその役割を決定したため、リーダー陣のクラス配分が偏り、メンバー間での情報のやり取りがスムーズにいかず、リーダーをはじめ一部の学生に負担が偏ったり、リーダーとその他の学生のずれを生んだりした。担当教員もこういった組織の指導経験の不足から適切な指導・援助を行うことができず、運営の困難に拍車をかけた。

これらの経験を踏まえ、3年目からは、1学年4クラスの各クラスリーダー、イベントごとの主担当者なども加えることとした。これは、組織内

に責任を背負う人間を多く配置し、負担感が一極集中することを避けようとする意図があった。イベントや活動ごとに中心となり負担を負う経験をする学生が増えたことにより、同じように負担を負う立場の学生に対しての思いやりから、お互いの協力・協調の意識も芽生え始めたように感じられる。

また、各役割の選出方法について、イベントの主担当者は、学生の特技・意欲を生かすため立候補制としたが、リーダー・サブリーダー・クラスリーダーについては全メンバーが責任をもって選挙で選ぶこととしている。その際教員は、選ぶ側も主体的な営みとして判断するという意識づけのために、投票にあたっては、すべての学生が責任をもって行うように声掛けをしている。具体的には、「特定の学生がやりたがっているから任せておけば良い」「面倒だからこの人に押し付けておけば良い」という意識ではなく「この人なら任せられる」という人を責任をもって選ぶことと、そういった気持ちで選出したならば、「みんなで選んだリーダーを責任をもって支える」ことである。このことは、活動時にメンバーから「リーダーがやっているのに、私たちがやらないわけにはいかない」との発言が聞かれたことにもつながっているように思われる。

(3) 活動の進め方の工夫

活動を進めるにあたり、G会結成3年目からは新年度が始まる前に新リーダー・サブリーダーを中心として年間計画を立てることとしている。その立案方法も、4年目以降は前年度の活動計画表を元に検討できるようになったため、リーダー陣によってたたき台を作成し、その後G会全体で検討・承認を得る形となった。その際、オープンキャンパスや運動会、後輩へのアドバイススピーチといった「学校や教員からの依頼に応じてG会で企画・運営するもの」と、広報紙やレクリエーションイベントなど「学生からの発案で、学校に働きかけて実現していく自主企画行事」とを学生が意識できるようにしてきた。これは、所属する学校組織のために力を発揮することと、自らのイメージを実現していくことの充実感・達成感の両方を学生の自信へとつなげ、自分や周囲の環境に対してバランス良く主体性を発揮できるようになってほしいとの思いからであった。

また、活動時には教員が進行するのではなく、リーダー・サブリーダーとイベント主担当者を中心に仕切るようにしている。これも、あくまでも学生が自分たちで責任をもって作り上げていくというプロセスを体験することで、物事に対して自らを主体として考え行動する感覚を育てたいという目的がある。

くわえて、G会結成2年目以降には教員との対話の中で学生自らがG会のルールとなる「G会規約」を作成し、それに基づいたグループとなることを目指して活動している。現在のG会規約は、以下の通りである。

- ・G会は、自分たちで保育学科を盛り上げたい人たちである。
- ・G会は、自分たちで保育学科を面白くしたい人たちである。
- ・G会は、自分たちで保育学科をより良く引っ張っていきたい人たちである。
- ・G会は、上記のことを考えたい人や実際に活動したい人たちである。
- ・G会は、後輩から憧れられる人になる人たちである。

このルールについても、毎年自分たちで見直し確認することで、自らがルールを定めた主体であることの意識を学生が持ち、各活動に主体的に取り組むことを期待している。

(4) 教員のスタンス

1) 対話し相談する存在として

教員は、指示・命令を出す存在ではなく、対話を通して、学生が主体として活動できるように指導する役割であるように心掛けている。例えば、学校・教員側からの依頼に応じるような活動で、事前に内容の枠が定められている場合も、学生がおかしいと思ったものについては変更案を出せることを伝え、教員と相談しながら企画を推進する。もちろんさまざまな兼ね合いから学生の思いが通らないことはあるが、それも踏まえた上で、あくまでも教員は学生と学校側を折衷したり、学生が単に指示を受けてこなすだけで終わらないようにする。このことは年間活動計画立案の際も同様で、前年度の内容をそのまま踏襲しなくて良いことを教員側から事前に伝えておく。前年度の内容を踏襲することになった場合も、機械的・受動的に踏襲するのではなく、必要性を自ら判断して踏襲す

るという意識を持たせるために、その都度働きかける。もちろん、教員が足りないと感じるころ、気になるところは放任せず、客観的な立場からの気付きを述べるが、さまざまな可能性を示した上で結論は学生に委ね、極力それを尊重するようにしている。

2) 励まし、承認する存在として

G会には、2016年現在で幼児教育コースの約半数にあたる91名が所属しており、人前に出るのが得意であったり、人のフォローが得意であったり、自信がある・なしなど、さまざまな特徴をもった学生がいる。筆者らは学生に、自分も組織にとって価値ある主体の1人であるという自覚をもってほしいという思いがあった。それゆえ、明るい人は明るいなりに、穏やかな人なら穏やかに各自の良さを発揮すれば必ず組織内で力となることを伝え続け、どのような気質の学生も自分に自信をもって取り組むことを目指して働きかけている。

特に年間4回実施されるオープンキャンパスでは、G会の学生が中心となるため、参加高校生にとってはメンバー一人一人がすべて大学の象徴となることを伝えている。そして、会話でのコミュニケーションがどうしても苦手な学生には、最初からそこを克服することに意識を向けるよりも、高校生に折り紙を教えながらかかわるなど、会話以外の方法を提案し、まずは自分の得意なことやできることをきっかけとしてかかわるように投げかけた。自分の力で高校生対応ができたという経験は、少しずつメンバーに自信をつけていくことにもなる。そうして身につけた自信は、自ら考え行動しようという意欲につながり、主体性につながるものと考えられる。

5. 2016年度(結成5年目) G会メンバーの意識調査

(1) 目的

ここまで、2012年度G会結成時からの活動における様々な問題や変化を、コミュニケーション力と主体性を中心に考察してきた。2014年度時のアンケート後、現在のG会のベースが見え始め、その翌年となる2015年度に入学してきた1年生メンバーが、現在2年生となっている。そこで現時点でのメンバーの学生はどのように感じているか、アンケート結果から検証したい。

(2) 方法

調査対象

山口芸術短期大学G会メンバー 81名

(1年生43名、2年生38名)

調査時期 2016年12月

調査内容

- ・ G会活動を通して身についた力
G会活動を通して身についた力について、「主体性」「積極性」「協調性」「自信」「コミュニケーション力」「企画力」「運営力」「造形的表現力」「音楽的表現力」「身体的言語力」「言語的表現力」の計11項目から選んで○をつけるように求めた(複数回答可)。あわせて、なぜその力がついたと思うか、理由を自由記述で回答するよう求めた。
- ・ G会活動での役割に対する効力感
自分の役割がG会活動で機能していたかを尋ねた。リーダー他、活動の主担当を担った学生のみ回答。
- ・ 今後の活動へのアイディア
リーダー他、活動の主担当を担った学生のみ回答。

(3) 結果と考察

1) G会活動を通して身についた力

G会活動を通して身についた力の結果については、表1に示す。

表1 G会活動を通して身についた力

	1年生 n=43	2年生 n=38
主体性	4.7%	42.1%
積極性	27.9%	52.6%
協調性	55.8%	55.3%
自信	11.6%	31.6%
コミュニケーション力	83.7%	76.3%
企画力	7.0%	23.7%
運営力	9.3%	15.8%
造形力	14.0%	23.7%
音楽力	4.7%	5.3%
身体力	4.7%	10.5%
言語力	2.3%	10.5%

コミュニケーション力が身についたと感じている学生が1年生83.7%、2年生76.3%と両学年ともに最も多い。これについて自由記述欄を見ていくと、オープンキャンパスをはじめさまざまな行事の企画・運営を通して、G会活動をしていなか

ればかかわる機会の少ない先輩や後輩、友人以外の他クラスのメンバー、高校生や保護者など他者とかわる機会が多いことが理由として挙げられている。

コミュニケーション力が身についた理由として、1年生からは「自ら話しかけるのが苦手だったが、初めて会う高校生に積極的に話しかけた」「今まで話しやすいと言われたことがなかったけど、オープンキャンパスで後輩と話す機会があって話しやすいと言われて嬉しかった」「高校生など全く知らない人と話すことに恥ずかしさがなくなった」などの、オープンキャンパスにかかわる意見も多く挙がっている。オープンキャンパスは、1年生にとっては高校生を迎え入れての初めての経験であり、多少なりとも不安と緊張を抱えながら取り組んでいたことが考えられる。そのような中で、G会組織では後輩でありながら、参加高校生を迎え入れる先輩の立場で初対面の他者に自ら進んでコミュニケーションをとる経験をし、そのことが成功体験となって、コミュニケーション力向上の実感につながっていると思われる。それに対して2年生は、多くの学生が「人とかわりながら取り組むことが多かった」との書き方にとどまっており、1年生ほど多様な回答は見られなかった。これは、1年生と2年生の経験の違いによるところが大きいと考えられる。2年生の多くは、前年度に1年間のG会活動を経験しており、それを踏まえて2年次の活動に取り組んでいる。そのため、1年生と比べて不安や緊張が少なく、こういったアンケートに「コミュニケーションがとれるようになった」という意識での記述が少なくなっているものと思われる。ただし、それはコミュニケーションに対する意識が低下していることの表れではなく、各活動においては、コミュニケーションの質にまでその興味が深まっていることが感じられる。例えば、運動会やオープンキャンパスの準備において、「この説明で分かるか」「伝わるか」と試行錯誤する2年生の姿からは、ただ自分が発信するという意識だけでなく、受け手のことに配慮しながらコミュニケーションを考えている様子が見て取れた。

一方で、主体性が身についたと感じている学生は、1年生4.7%で11項目中8番目、2年生は42.1%で4番目と大きな違いが出ている。これは、1年生は先輩が主担当者となる企画に参加しなが

ら、初めての行事を経験していく段階であるのに対して、2年生は行事の企画・運営の中心になることが多く、リーダー陣やイベントの主担当者も2年生であることが理由として考えられる。例えば2016年の運動会の準備時には、教員からの確認に対し、2年生主担当学生から「先生は特にやることはないので見ておいてください」など、教員に言われたことをただ実施するのではなく自分たちが主体となって活動を進めていると感じさせる発言もあった。2年生のアンケート回答にも「責任」「使命感」「運営側の自覚」「誰かがやってくれるのではなく、自らが仕事を見つけてやるが多かった」といった記述が見られた。このような立場で当事者意識をもって取り組むことにより、ただ受動的に引っぱられるのではなく、自らを活動の主体とを感じる機会も増えたと思われる。

2) G会活動での役割に対する効力感や今後の活動へのアイディアの回答から

リーダー等の役割を担当した学生の多くが、担当した役割がしっかり機能したと感じており、活動に効力感を感じながら主体的に取り組んだ様子が見られた。しかし、一部学生からは、うまく機能していない実感が挙がっている。学生個人の置かれた状況の違いによって止む無くという場合もあるが、「担当した係の集まりが1回しかなかった」「担当係の仕事があまりなく、係であったことを忘れてしまった」など、組織の仕組みや活動の進め方によって主体性をもって活動することが難しい様子が窺われた。

しかし、アンケートにはこれらに対する今後のアイディアとして「もっと明確に役割分担をする」「係を作って全員で盛り上げていく」「係を決めたなら、継続して集まり活動する必要があると思います」「みんなが関われる活動をもう少し増やしたら良いと思いました」「活動を記録する人がいれば、引き継ぎやすくなると思う」「年間計画を立てて満足ではなく、活動がより充実するために記録をつけたり、係ごとにその月の活動をまとめたりしても良いと思います」など、自分たちが主体的に活動するための対応策が挙げられており、主体的に活動したいという強い希求が感じられた。

6. まとめと今後の課題

ここまで、G会活動を通じた保育者としての力量向上について、コミュニケーション力と主体性に焦点をあてて検討してきた。本研究で明らかになったように、コミュニケーション力に関しては、G会のさまざまな活動を通じて力をつけることができるようになっており、学生自身もそのことに自覚的である。しかし主体性については、G会組織の変遷や学生の活動の様子から筆者らが考えていたほど、学生自身には力をつけたという自覚はみられなかった。G会活動は、自分たちで楽しみながら活動を進めることが主体性につながると考え、活動を変化させてきた。筆者らはメンバーに対し、「場の雰囲気を作り出すのは人であり、G会のメンバー一人一人が自分たちでそれを作り出していくのだ」ということを折に触れて伝えているものの、所属する学生の大多数が主体性の向上を実感しながら活動することは、まだ不十分である。

そこで今後の課題として、コミュニケーション力と同じように、多くの学生が主体性を発揮し、また身につけられるようにするには、学生自身が役割を自覚し自らイメージを膨らませ活動を生み出していく仕組みと指導の工夫が必要である。同時に、学生が自分自身を活動の主体として実感できる機会を増やしていくことも必要であろう。

引用文献

- 1) 森下嘉昭、上村有平：劇の創作活動を通じた保育学生の表現力の育成，全国保育士養成協議会第51回研究大会研究発表論文集，488～489（2012）

付記

本論文は、日本保育学会第68回大会（2015年5月）、全国保育士養成協議会第55回研究大会（2016年8月）での発表をもとに加筆・修正したものです。なお、本研究は2015年度山口芸術短期大学若手研究助成および2016年度山口芸術短期大学特別研究助成を受けて行われました。

